

## 『泉の書』（1526年）に描かれたルーアン

### The "Livre des fontaines" (1526). A View of Rouen

永井 敦子  
文化政策学部国際文化学科

Atsuko NAGAI  
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿では1526年にジャック・ル・リユールがルーアン市に献じた、彼自身による『泉の書』を紹介する。この書物は手書きのテキストによる説明書と当時ルーアン市の管轄下にあった3つの水道の地図、および都市全体の景観図で構成される。その叙述において、一方では水源から市内の水汲み場までの水道の現状、その水道の個別的な利用を認められた修道院または個人と都市との権利関係、水供給の改善について個別具体的に詳細な叙述をしているが、もう一方で価値判断基準としては「公共の事柄」という幅広い概念を適用している。ル・リユールは当時の都市環境を描くのに、現代の私たちとは異なる視点をもっており、その視点の相違が注目される。

This essay is an introduction to a view of Rouen, represented in the "Livre des fontaines", which was composed by Jacques Le Lieur and donated to the city hall in 1526. The "Livre" consists of a handwritten book (77 folios of vellum), a picture of a general city view and 3 ichnographic maps of the canals from which the citizens of Rouen were supplied with water. In his narrative, Le Lieur provides detailed knowledge, such as the origins of water sources, the length of canals, information about various fountains, the names of streets, squares, churches and principal buildings around the city, and agreements between the city and monasteries or individuals to construct aqueducts. He also includes his advice on repairing some particular points of the canals, on extending the canals in specific places, and on constructing new fountains. He describes the canals in great detail, while at the same time evaluating them on their utility within "chose publique". As "chose publique" was often referred to by members of the city administration, it offers a comprehensive understanding of how Le Lieur and his contemporaries imagined their city.

#### はじめに

フランス・ノルマンディの州都ルーアンはセーヌ河の北岸（右岸）にあり、中・近世にはパリと海とを中継する河港都市、また毛織物業を始めとする手工業都市、さらにノルマンディを管区とする大司教座 *archevêché* と、高等法院 *parlement* など王国の主要な地方機関の所在地でもあった。16世紀の都市人口は4万から7万と推計され、フランス屈指の地方都市に数えられる<sup>1)</sup>。都市の権限は比較的小さく、14世紀から17世紀まで市長 *maire* 職が廃止されていた間、都市参事会 *conseil de ville*（参事会員は6人で、うち4人は新任、2人は再任）は国王直任のバイイ *bailli* または代理官 *lieutenant du bailli* の統括のもとにあり、刑事・民事裁判権も都市参事会ではなくバイイにあった。近世を通じてリヨンなどの発展に較べるとルーアンは地位を下げていくので、ルーアンにとっては、百年戦争による荒廃から回復した後、宗教戦争による混乱を迎えるまでの16世紀前半が繁栄の頂点と言える。その時期ルーアンは建築ブームであり、3代のルーアン大司教、ギョーム・DESTOUTTUVILLE（1453年就任）、ジョルジュ・ダンボワーズ1世（1494年就任）、同名の甥ジョルジュ・ダンボワーズ2世（1511年就任、1550年没）の在位期間中に、大聖堂と大司教館を含む多数の教会・修道院と、高等法院をはじめ聖俗諸機関の入る建物が相次いで修築された。そればかりでなく、都市城壁内に残る古い城壁が撤去され、主要な街路や市場も整備された<sup>2)</sup>。

当時のルーアンを描いた史料の一つに、1526年にジャック・ル・リユール Jacques Le Lieur が都市当局に献じた『泉の書 *Livre des Fontaines*』がある<sup>3)</sup>。

表題の「泉」の語は、史料本文では「湧き水 *source*」と区別される整備された「水源」、その水を引くための「水道」、その先で人々が利用する「水汲み場・噴水」の意味で使われる。この史料は犢皮紙にテキストを手書きした書物としての説明書のほかに、図面としての水道図が3枚と、都市の全体的な景観を描いた図面が1枚（図1）、図はいずれも継ぎ合わせた犢皮紙に手書き・手彩色したものが組み合わさっている。これらはまとめて鍵付きの箱に納められ、机に鎖でつないで市庁舎に保管されていた。

水道図3点は3か所の水源から市内に至る水道の経路がそれぞれに描かれた、いわば「絵地図」で<sup>4)</sup>、ル・リユールはこれを「図 *figure*」と呼ぶ。いずれも地面をほぼ平面図として水道が中央を貫通する構図で、道路または広場として露出している地面を白く残し、道の両側と広場の周囲には地所の景観や建物の外観などを描いている。ル・リユールの測量で水道の長さは、ガロール Gaalor 水道971トワーズ、ヨンヴィル Yonville 水道1,171トワーズ、カルヴィル Carville 水道は大司教の水道と都市の水道の2本が並走しており、長いほうの大司教の水道が2,256トワーズ、都市の水道はその途中までで2,036トワーズあり、図ではいずれも数メートルの長さで描かれていて、縮尺は約430分の1と計算される<sup>5)</sup>。図の形も水道の屈曲に従ってヨンヴィル図は長方形、ガロール図は丁字形、カルヴィル図は長方形に鉤形を継ぎ足した形をしている。

これらの図は中世末期から近世初めのルーアンを描いた図の一つとして、しばしば研究書の挿絵に部分的に使われてきた。しかし最近では、都市図を作成者による都市認識を示し、あるいは見る側の都市認識を形成するも

の、すなわち都市の表象 representation として扱う研究が盛んになってきている<sup>6)</sup>。本論においても、この図をフランス・ルネサンス期の一人のアマチュア文人、または当時の人々による都市認識を探るための手がかりとする。筆者はこれまでにルーアンの都市参事会文書・高等法院文書などから、16世紀当時の人々による都市の秩序の認識・表明のあり方を探ってきた<sup>7)</sup>。この『泉の書』もまた、当時の都市環境に関する重要な史料であると同時に、当時の都市についての情報の組み立てを示す重要な史料として注目したい。

## 1 作者ジャック・ル・リユール

ルーアンのル・リユール家はもともと商人の家柄で、古くは1275年に「ルーアンの同輩ないし都市参事会員 pair ou conseiller de Rouen」ルイ・ル・リユールなる人物が、市内の聖ウーアン修道院に葬られた記録がある。その後14世紀には城砦防衛隊長・市長などを歴任して爵位を得たジャック、15世紀にはルーアン・バイイ府の国王弁護士で、やはり爵位を得たロベールと、ルーアン市参事会員に選出されたジャックの兄弟らを輩出する。『泉の書』の作者ジャックは<sup>8)</sup>、このロベールの息子として1475年頃に生まれたと見られるが、記録に現れるのは1501年に父を亡くした後で、1503年に国王の公証人・秘書官の職を得た。この頃すでに貴族 noble homme でシドトー殿 seigneur de Sidetot と称しており、母からブレムトー Bresmetot (Bresmetot または Brametot と綴る) を、叔父ジャックからボベナール Bosc-Bénard (別名ボベナール・コマン Bosc-Bénard-Commin) を継承して、これらについても「殿 seigneur; sieur」をつけて呼ばれた。1517年にルーアン市参事会で新任参事会員 conseiller nouveau に選出され、3年の任期を終えた1520年に再任参事会員 conseiller ancien となり、1526年、32年、41年にも再任されている<sup>9)</sup>。この間に都市からの地方三部会議員に選出されたこともあり、1537年に勅許で一代限りの爵位を獲得した。死亡の記録はないが1550年頃と見られ、息子アントワヌの代に、ブレムトー・ボベナール殿はノルマンディ地方三部会の貴族議員になった。

ル・リユールはコピイストや装飾工を雇って手稿本を製作させており、『泉の書』のほかに詩集・時祷書・書簡詩などを残した<sup>10)</sup>。また当時ルーアンでは、聖母マリアの無原罪のお宿り Immaculée Conception を讃える「パリノ文芸祭 Puy de Palinods」が開かれ、聖職者や高等法院官僚から富裕な商人・手工業者までが詩作を競っていた<sup>11)</sup>。ル・リユールは1516年以来これに参加し、1544年に最高位 Prince du Puy を獲得した。したがって彼は建築などの技術者というよりアマチュア文人であったが、『泉の書』の記述によれば、1518年1月10日(原文のまま、新暦で1519年)に自ら都市参事会員として地区長・都市工部官らとともに、ガロール水道が通る城砦を訪れて地中の水道に通じる壁に穴を開け、水源まで水道をたどってから戻って再び壁をふさいだ<sup>12)</sup>。これに先立ってヨンヴィル水道が

作られた際には、水源から都市城壁外のシューケ通りにある貯水槽まで開通したところで、高低差が足りないとの理由で工事が中断していた。1518年にこれを都市城壁内まで延長するため、都市参事会が建築家や石工などに再度の計測を命じ、そのときにル・リユールが都市参事会員として地区長・都市工部官らと調査に立ち会った<sup>13)</sup>。そしてヨンヴィル水道が市内まで延長されたときには、この水道から枝分かれする導水管を自邸に設置させている<sup>14)</sup>。彼はこうした経験に基づいて『泉の書』をまとめたのだろう。

## 2 『泉の書』の構成

『泉の書』の説明書では表紙に続いて第1葉裏にル・リユール家の紋が描かれ、第2葉表から本文が始まる。ル・リユールは本文で、まず一般論として水という元素、ついで古代のローマ市への水供給について指摘し、「それゆえ、水が人々の生活に有用かつ必要であるが故に、政治のことがらを引き受ける都市参事会員、総督と官僚はすべからず、全力をあげて、都市にあたう限り豊かに水を供給すべく尽力し配慮せねばならない。この都市ルーアンにおいて、我々の祖先たるかつての参事会員と総督らもまた、これを無視してはこなかった。その明らかな証拠として、第一に、かつてガロールと名付けられた城砦水道が、都市ルーアンの6、7か所の公共の水汲み場と革なめし業者に水を供給している<sup>15)</sup>」と、ルーアンの水道に焦点を絞る。

水道の説明は古い順である。ル・リユールによればガロール水道の開通年代は不明で、最も古い記録は1257年にルーアン市長・同輩衆とコルドリ工修道院との間でなされた水供給の合意を、国王ルイ9世が承認した文書である。次のカルヴィル水道は、ルーアン大司教ジョルジュ・ダンボワーズ1世が東部の聖イレール地区に水を供給するために、都市当局と費用を折半して1500年に開通させた。最も新しいヨンヴィル水道は、西部のコーショワーズ地区と、特に「旧市場広場で牛・豚・魚が売られており、ゴミと悪臭が除去されない」状態を改善するために開設されたが、既に述べたように1510年には都市城壁外のシューケ通りまで開通したところで工事が中断し、1518年に完成した<sup>16)</sup>。

第5葉裏には、リボン状の額縁をつけて「城砦水道、旧名ガロール水道」と記し、第6葉表からガロール水道の説明を始める。さらに第16葉表にリボン状の額縁をつけて「クロシュ水道」、第17葉表にも同様にして「聖ロー水道」と、分岐する水道について説明する。ル・リユールの記述は第20葉表までで、続くページには1530年から1601年までの日付で、水汲み場や水路の増設などの情報が追加された。第24葉裏には、もともル・リユールが書いたと思われる、額縁つきの「ここに図によるガロール水道が続く」云々の記述があり、ここにガロール水道図が折り畳まれて挿入されていたと見られる<sup>17)</sup>。

ガロール水道は北の郊外区 faubourg にあるモン・ト・マラード丘の水源から始まり、フィリップ・オーギュ

スト城砦の地下で都市城壁内に入る<sup>19)</sup>。本流は新市場、屠殺広場、都市の鐘楼の傍を通過して南下し(図2)、セーヌ河にほど近いコルドリエ修道院の水汲み場を最下流とする一方、都市城壁内で分岐して、支流の一つは蓋をされないルネル川となり、ほかにクロシュ水道と聖ロー水道と呼ばれる支流にもつながっている。

続くカルヴィル水道の説明は、第25葉裏に、やはりリボン状の額縁をつけて「ダルネタル水道、別名カルヴィル水道」と予告し、第26葉表から第41葉裏までル・リユールによる記述が続く。その後ろは第48葉裏に額縁付きで「ここに図によるカルヴィル水道が続く」云々の記述が現れるまで、罫が引かれただけの白紙ページである。水源は最も遠く、ルーアンの郊外区と、隣町にあたるダルネタルとカルヴィルの境界近くにあり、この辺りから市街に向かってロベック・オーベット両川が流れている。水道はこれらの川とほぼ平行に作られ、水道からあふれた水をロベック川に流す排水孔 *vuidenge* を備えていた。聖イレール門の傍から都市城壁内に入り、大司教の水道と都市の水道に分離される。といっても2本の水道が互いに接したまま市の中心部へ向かい、市場のあるロベック橋広場で南に方向を変えて聖マクルー教会前の貯水槽まで続く。その聖マクルー教会の外壁に接して都市の水汲み場が設置され、都市の水道はそこを最下流とするのに対して、大司教側はさらに大司教館と聖マドレーヌ修道院まで続く。

ヨンヴィル水道についても同様に、第49葉裏にリボン状ではないが額縁をつけて「ヨンヴィル水道」と予告し、第50葉表から第63葉表までその説明が続く。水源は西の郊外区にあり、コーショワーズ門の下手から市街地に入って旧市場と牛市場を通り、ガロール水道の最下流であるコルドリエ修道院の前を東進し、セーヌ河に架かる橋に近いリジュー司教館前の噴水を最下流とする。

続いて第63葉表の途中から、大聖堂に水を供給するノートルダム水道、そこから分岐する聖アマン水道についての説明がある。ノートルダム・聖アマン水道は大司教座聖堂参事会の管轄下にある、いわば第4の水道で、ル・リユールはその経路だけを記述し、測量も図示もしていない。さらに続いて第65葉表から第66葉表にかけては、ル・リユールが市庁舎で『泉の書』を現職の都市参事会員らに渡した状況が書かれている。第67葉表と裏には、1526年までにおこなわれたヨンヴィル水道の改修などについて、ル・リユール自身の追記と見られる部分がある。その後ろは第72葉裏に額縁付きで「ここに図によるヨンヴィル水道が続く」云々の記述が現れるまで、罫が引かれただけの白紙ページである。第73葉表から裏にかけては、『泉の書』が市庁舎で引き渡された状況が都市の書記パピヨンによってもう一度説明され、この部分が都市側の受領確認となっている。その後ろは罫線が引かれただけの白紙である。

### 3 ル・リユールの関心

ル・リユールは本文で、それぞれの水道を水源から下流までたどりながら説明する。その記述では以下の三つ

に重点が置かれるように見える。

まず水道の経路と水道の長さ、水汲み場などの状態である。経路については水道が通る地所の所有者名と通りや広場の名で記される。また水道の途中には貯水槽 *cuve* があり、その最寄りの建物の名が書かれ、それぞれ上流から幾つめの貯水槽という番号で同定される。水道の長さについては、貯水槽から次の貯水槽または水汲み場などまでの距離をトワーズ単位で記している。貯水槽の番号とトワーズ単位での距離のように、記述では数字が多用されるが、水道の底の舗装や天井アーチ *voulte* の造り、土管 *cahot* そのほかの導水管 *chantepleure*; *tuyau* の使用といった説明も見られる。

水汲み場の設備については、ガロール水道の屠殺広場の水汲み場について「3つの吐水口がある<sup>19)</sup>」、カルヴィル水道の聖イレール通り沿いで石十字架広場近くの水汲み場について「4つの吐水口がある<sup>20)</sup>」のように、吐水口の数が記されただけのものもある。ヨンヴィル水道の3か所の水汲み場については特徴が記述されていて、まず旧市場広場に面した救世主教会の墓地の塀の外側に、「3頭の牛の頭をかたどった3つの吐水口から水が出る」ものがある<sup>21)</sup>。そこから南へ下って聖ヴァンサン教会付属墓地への入り口には、「銅製の牛とロバの頭をかたどった2つの吐水口から水が出るキリスト生誕像、この場所にも都市にとっても素晴らしい装飾<sup>22)</sup>」、最下流のリジュー館の傍には「銅製の2匹の火トカゲの吐水口の上に、石でパルナス山をかたどり、哲学像、アポロ、ペガスス、九人のムーサを配し、特別な機会には哲学像の乳房とムーサの楽器、ペガススの足下から噴水が出る仕掛け<sup>23)</sup>」がある。

次にル・リユールの記述の大部分を占めるのは、水道をめぐる都市当局と修道院や俗人などとの権利関係である。例えばガロール水道からコルドリエ修道院が水を引く際に、ルーアン市長・同輩衆とコルドリエ修道院の合意を国王ルイ9世が承認した文書を引用し、自ら「国王公証人・秘書官であるジャック・ル・リユールによって、市庁舎に保管されている古い羊皮紙の原本と照合された、1524年1月20日(原文のまま、新暦で1525年)」と記して署名している<sup>24)</sup>。これらの引用によって、都市城壁の内外で水道の近くにある修道院、または都市参事会員クラス以上の少数の名士の館に、水道が引かれていたことがわかる。

またガロール水道を利用するコルドリエ修道院は、1456年にルーアンのブルジョワ・都市参事会員が、この水道から屠殺広場と旧市場広場に水を引くとした決定に同意を与えており、ル・リユールはその文書を引用して照合の署名をしている<sup>25)</sup>。ガロール水道の支流の聖ロー水道には、聖ロー修道院の外側の施物通りに水汲み場があり、この利用をめぐる1299年(原文のまま、新暦で1300年)に、聖ロー修道院と施物通りに住む「貧民」の間で起こった争いについて、ルーアンのヴィコントが調停した記録も引用している<sup>26)</sup>。カルヴィル水道は1500年の開通時には、屠殺場がある聖十字架教区までであったが、1516年に都市参事会が「公共の事柄に善となるように」これを延長して、隣の教区の聖マクルー教会に水汲み場を設置すると決めた。この

設置をめぐる聖十字架教区民との係争についても、その経過とバイイによる判決を引用している<sup>27)</sup>。

こうした数字と引用文書の合間に、水道の維持管理と水供給量の確保、水汲み場の増設などについての提案や改善策が現れる。例えばガロール水道で都市城壁の外側の部分について、「都市にとっての有用性のゆえに」底を石で舗装していない箇所を舗装し、また毎年か2年ごとに点検するのが良いと意見している<sup>28)</sup>。また、この水道で守衛所の前に貯水槽と導水管を設置して市庁舎の中庭に新しく噴水を作ること、「たいへん正當かつ有用なことで、それほど費用もかからない」として提案している<sup>29)</sup>。

カルヴィル水道については水源の受水槽 cyterne にある排水孔を改修して、より多くの水を市内に導くのが良いと意見する<sup>30)</sup>。この水道の大司教側と都市側の分け方についても、「先に述べた受水槽、つまり都市城壁の内側で、城壁に接している石造りの受水槽のところまで都市と教皇特使下の水が分けられる。この部分については、水道の分割をラ・工殿の庭の隅からとすれば、水道をいったん低くしてから大司教の庭の噴水のために揚水する際の莫大な費用がかからなくなる。ラ・工殿の庭の隅に都市用の貯水槽があり、そこまで都市の壕を通る導水管で直接水を来させてから水道を分割しても、都市には何の障害もない。大司教館の庭の噴水のための揚水機の水は別の導水管で引くようにし、この水道の水は大司教と都市ですべて活用できる<sup>31)</sup>」と改善点を指摘する。さらに都市側の水道をオーギュスタン修道院と塔広場まで、簡単に延長できると意見している<sup>32)</sup>。ただし1595～96年の追記によると、塔広場まで延長されたのはカルヴィル水道ではなくガロール水道であった<sup>33)</sup>。

ヨンヴィル水道については、水源から受水槽に入る水を増やすための改良の余地があるとしている<sup>34)</sup>。実際に『泉の書』引き渡しの同年に追記された部分に、水源の受水槽にほかの流れの水が入って都市への導水の妨げになったため、水道を掘り返して改修した記録がある。その際に地中で新たな湧き水を見つけて、それらを水道に導くための貯水槽を設置し、また別にもう一つの水源からも受水槽に水を集めるようにした<sup>35)</sup>。なおこの水道は、すでに指摘したように旧市場広場周辺などの衛生条件を改善する目的で開設された。その目的の達成について、旧市場広場の「3頭の牛」の噴水のところに、「無駄になる水を集める貯水槽があり、そこから水を舗道に流して魚市場側も宮殿側もエヌヴァル邸の前も、そこにあるゴミを洗い流す」ようになったと記している<sup>36)</sup>。

水道はまた都市を囲む城壁の外の水源から城壁の内側に水をひくので、城壁と壕による都市防衛の抜け穴になり得た。ガロール水道が市内に入る地点では、「この第3（の開口部）から城壁の大塔の前の壕の入り口まで24トワーズ。この水道の内側およそ8トワーズのところに、都市が包囲された際に、この水道を知っている敵の侵入を防ぐため、水道をふさぐ壁がある」と記している<sup>37)</sup>。大司教が管轄するノートルダム水道についても、「この水道はアーチ天井で覆われており、戦争などの際に入って急を知らせることができるとあえて指摘してお

くことが、都市および公共の事柄にとって取り返しのつかない被害を防ぐことになる」と、利用価値を述べている<sup>38)</sup>。

さらにル・リユールは『泉の書』を都市当局に納めるにあたって、「治安行政 police」を担う市庁舎では、この書を継承して記述に誤りがあれば修正し、また公共のためにはこの記述を元にして水道に更に改良を施すべきだと記している<sup>39)</sup>。都市当局の側も、「現在この都市にある水道を水源から、またそれらの水道について記憶すべきほかのこととともに、書物と図で示したものを「永久に都市に留めるであろう」と記している<sup>40)</sup>。

#### 4 図の描写

3枚の水道図は説明書に対応するように、水源の貯水槽の様子、そこから水道が埋設されている地所と街路・広場に沿って、周囲の教会や家並みと水汲み場の様子が描かれ、街路名や目印となる建物の名が書き込まれている。最下流の近くにル・リユール家の紋が描かれており、この紋の上下から判断するならば、本文の記述とは逆に水道を遡る方向に描かれたようにも見える。ただし図に描かれている景観の天地は一定せず、1本の道を挟んで向かい合う家々が、ある部分では道の両側に1階の床をつけて互いに上下反対に描かれ、ある部分では上空から道の奥を覗き込んだように、道の両側に屋根だけを並べて描かれている。建物を斜めから描いている部分はあるが、遠近法は基本的に用いられない。

水道は地下を通るので地表から見えないはずだが、図では2本の平行線の間を薄青く着色して描かれ、水道にトワーズごとの目盛りを打って長さが示される。ただし目盛りの間隔が一定でなく、水道の長さ以外の部分については測量されていないので、図の縮尺も、水道の屈曲の角度も正確とは言えない。貯水槽は水道をまたぐ四角形で描かれ、上流から幾つめという番号が付されるが、番号にズレが生じている箇所がある<sup>41)</sup>。貯水槽の大きさや、アーチ天井であるかどうかといった造りについては図で判別できず、水道が土管などで分岐した先が描かれていない部分もある。

水道の周囲の教会・修道院、市庁舎や裁判所・市場、水車小屋、少数の名士の邸宅、都市城壁と門などは特徴を表して描かれている。しかもデルサルによれば、この図が描かれた当時は未完成であった聖エルブラン教会や租税法院館（のちの地方財務局）が完成した形で描かれ、これは当時ルーアンで活躍していた建築家ルーラン・ル・ルー Rouland（または Roland）Le Roux とル・リユールの交流を裏付けるという<sup>42)</sup>。一方で地所の塀・柵囲い、家並み、セーヌ河に浮かぶ船は類型化され、人影も薄い。

図の複数枚を整合させると、同じ箇所での家の戸数に差があるので戸数が正確でないことがわかる<sup>43)</sup>。またコルドリエ修道院の前で2つの水道が交差するが、どちらの水道図にももう一方の水道は描かれていないうえ、ガロール図ではコルドリエ修道院が西側から、ヨンヴィル図ではコルドリエ通りに面した南側から描かれている。したがって水道図3点はそれぞれが都市の部分図として独立している。ル・リユールがこれらに添えた都

市景観図は市街地の手前にセーヌ河を配し、河岸から遠い高等法院館や城砦も見えるような斜め上方からの構図で都市全体を描いている<sup>44)</sup>。しかし市街地には建物が密集しており、大聖堂の塔、ル・リユールの教区である聖マルタン・デュ・ポン教会の塔、都市の鐘楼などが強調される一方で<sup>45)</sup>、水源も水道の通る街路・広場も描かれていないので、都市景観図もまた水道図に対して独立していると言える。

これらの図を整合させるため、現代の歴史家であるデルサルもバルデも、ルーアン市全体の地図の上に水道の経路や水汲み場の位置を記入した図を用意した<sup>46)</sup>。デルサルが言うように、ル・リユールの水道図は「今日このような作業に求められる正確さや厳密さに欠ける」としても「歴史家はそれを非難しない<sup>47)</sup>。」それどころか、『泉の書』の記述や図示について我々が欠けていると考えがちな部分が、16世紀前半に生きたル・リユールと現代人との都市認識の違いを示すであろう。

## 5 都市環境と「公共の事柄」

『泉の書』は、その記述や図示における着眼点と構成そのものが、当時の都市についての情報の組み立てを示すとしても、そこからル・リユールがルーアンの都市環境をどう捉えていたかを読み解くのは難題である。イタリア半島を除く西ヨーロッパの多くの都市については、1500年以前に描かれた個別の地図が非常に少ない中で、ル・リユールの図は先駆的な都市図の一つに数えられる<sup>48)</sup>。彼は地面を平面図、建物部分を側面図とした水道図においても、側面図に近い都市景観図においても、主要な建物の特徴と配置に注意を払い、具体的にルーアンという個別の都市を描いているからである。そのためかえて都市環境の叙述と描写をめぐって比較すべき対象に乏しい。

そのルーアンで、ル・リユールは現代の歴史家に建築ブームと言われるような、都市環境整備の現場を生きていたはずである。実際に彼はすでに述べたようにいくつかの建物の完成後の図を予想して描いたほか、カルヴィル水道図のなかで聖ウーアン修道院の屋根のない礼拝堂の向こうにクレーンをのぞかせ、都市景観図では大聖堂の身廊と袖廊の交差部にある主塔 *tour de la lanterne* を不完全な状態で描いている<sup>49)</sup>。彼の着眼点である水道について言えば、その開設や延長、水汲み場の新設と改修したいが重要な都市環境整備である。ゴーティエはルーアンの都市環境整備について、広場の整備や再区画化に焦点を当てながらも、15世紀半ばにガロール水道に屠殺広場の水汲み場が設置されてから、カルヴィル・ヨンヴィル水道の完成を経て、1530～31年に市庁舎前などの水汲み場が改修または新設されるまでを、一連の重要な動きとしてまとめている<sup>50)</sup>。ル・リユールが水道管理の現場の必要から『泉の書』を作成したのではなく、都市環境に対する何らかの概念をもって作成したとの解釈は可能であろう。しかしル・リユールが都市環境の指標として水道を位置づけ、『泉の書』でルーアンの環境整備や繁栄ぶりを描こうとしたとしても、『泉の書』の説明書の中で語られる言葉は少ない。

ル・リユールは『泉の書』の冒頭で水の有用性と、理想とするローマの水供給に言及し、カルヴィル水道を建設させたジョルジュ・ダンボワーズ大司教を「ローマ的な美徳を求め、とりわけルーアンの公共の事柄において名譽と善と拡大を実に重んじた<sup>51)</sup>」と賞賛する。もう一人、ヨンヴィル水道の完成のために都市に資金を貸与した高等法院評定官についても、「真に良く公共善を重んじた」と評価する<sup>52)</sup>。ここで用いられる「公共の事柄」「公共善」という言葉は、『泉の書』のなかで水供給の重要性を指摘する際だけでなく都市防衛についても用いられ、当時の用法としては人々の生活全般について広範囲に適用された<sup>53)</sup>。一方には「公共の事柄」と「有用性」という幅広い概念を価値判断の基準とし、もう一方でその内容あるいは判断理由の説明として、ジャック・ル・リユールの『泉の書』においては、水道の現状や改善方法について個別具体的で詳細な叙述がなされているのである。

このような詳細で個別具体的な説明は、16世紀前半のルーアンにおける他の史料にも共通する。例えば筆者が以前に取り上げた国王入市式もまた、都市の自己表現であると同時に都市認識の表れと捉えることができるが、その記録では都市を代表して国王を出迎えた聖職者・都市行政官・都市民らの所属や官職ごとの序列と人数と衣装、歓迎の意を表して市内に立てられた仮設舞台の装飾などの叙述が大部分を占めている<sup>54)</sup>。その叙述が都市の豊かさや秩序の表象であるとしても、都市の人口の多さや繁栄ぶり、聖俗諸機関の多様さとそれぞれの規模と権限分担について、入市式の記録を含めた当時の史料のなかで実際に語られる言葉は少ない。この記録者たちが、おそらく私たちが都市の豊かさまたは秩序を概念化する際の説明とは異なる視点に依拠しているのと同じく、ル・リユールの『泉の書』もまた私たちとは異なる視点から書かれ、描かれた。その視点の相違を超えて当時の都市を概念化するだけでなく、彼らの視点そのものを説明する方法はないだろうか。

図版

図1:ル・リクールによる都市景観図。手前がセーヌ河で、市街をほぼ南側から描いている。橋の奥に塔が2本並んでいるのは大聖堂西玄関の北の聖口マン塔と南のブル塔、その右横で塔の上が黒く平らなのが火災に遭った大聖堂の主塔。大聖堂の手前の暗い色の塔は聖マルタン・デュ・ポン教会。画面中ほどの額縁のなかで、ル・リクール自身が都市参事会員に『泉の書』を差し出している。その額縁の左側の塔は都市の鐘楼で、実際よりも大きく、大聖堂の塔とほぼ同じ高さで描かれている。画面左下の木に掛かっている楯は、ルーアン市ではなく、ル・リクール家の紋を表す。

Collections de la Bibliothèque municipale de Rouen.  
Photographie T. Ascencio-Parvy.



図2:ガロール水道図より。下のほうを左右に貫通するのが水道(目盛りが打ってある)で、画面左が上流(山側)、右が下流(セーヌ河側)。左下に新市場広場 neuf marche、広場の上は高等法院館 le pallais。そこから右へ水道に沿って肉市場が並ぶ la boucherye de machacre。水道をまたぐ四角い箱のように描かれているのは第8貯水槽 la Ville cuve で、そのすぐそばに現在もルーアンのシンボルとなっている大時計 l'orloge のアーチと鐘楼がある。鐘楼の下にあるのが屠殺広場の水汲み場 la fontaine de Machacre で、これは1530~31年に改修される以前に描かれたため、Collections de la Bibliothèque municipale de Rouen.

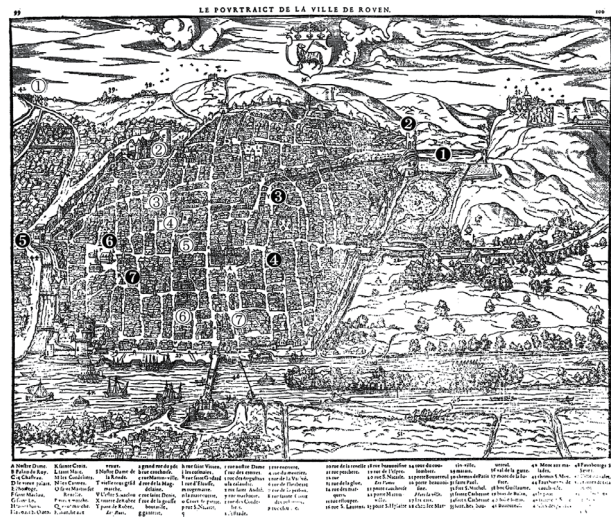
Photographie T. Ascencio-Parvy.



現在この場所で見られるものと異なる。アーチをくぐった先の上のほうに見える教会はノートルダム・ド・ラ・ロンド la Ronde 教会、これも現在は無い。

図3:ベルフォレによるルーアンの都市地図(1575年)。ル・リクールと同じくセーヌ河を手前に配しているが、私たちになじみの地図(平面図)に近い。これに水道の経路の要所を書き込んでみる。ガロール水道に沿って、①モン・ト・マラード丘、②フィリップ・オーギュスト城砦、③ルネル通り、④新市場、⑤大時計、⑥コルドリ工修道院、⑦塔広場。カルヴィル水道に沿って、①ロベック川、②聖イレール門、③ロベック橋広場、④聖マクルー教会。ヨンヴィル水道に沿って、⑤コーショワーズ門、⑥旧市場広場、⑦子牛市場。

Collections de la Bibliothèque municipale de Rouen.  
Photographie T. Ascencio-Parvy.



注

- 1) Philip BENEDICT, *Rouen during the Wars of Religion*, Cambridge, Cambridge University Press, 1981, pp. 24-31.
- 2) Yves BOTTINEAU-FUCHS, "La statuaire de la première Renaissance en Haute-Normandie", in: *Annales de Normandie*, 42-4, 1992, pp. 365-393; Bernard GAUTHIEZ, "Les places de Rouen, 1480-1530, et l'évolution des places en Normandie du XIIe au XVIIe siècle", in: Laurence BAUDOIX-ROUSSEAU et als. (études réunies par), *La place publique urbaine du Moyen Age à nos jours*, Artois, Artois Presses Université, 2007, pp. 151-162. 後者はルーアンの都市環境整備の開始を大司教ギョーム・デストゥートヴィルの時期または、さらに以前の百年戦争中とする見方を強調しているが、大聖堂と司教館の改修は主にジョルジュ・ダンボワーズ1世の時期になされた。そのジョルジュ・ダンボワーズは、国王ルイ12世の重臣でフランス・ルネサンスを代表する芸術保護者の一人である。Gennaro TOSCANO, "Le cardinal Georges d'Amboise (1460-1510) collectionneur et bibliophile", in: Frédérique LEMERLE et als. (dir.), *Les Cardinaux de la Renaissance et la modernité artistique*, Villeneuve d'Ascq, Institut de Recherches Historiques du Septentrion ("Histoire et littérature de l'Europe du Nord-Ouest", no 40), 2009, pp. 51-88. この時期(1450~1525年頃)ルーアンでは館 maison の建築も相次いだ。Raymond QUENEDEY, *L'Habitation rouennaise. Etude d'histoire de géographie et d'archéologie urbaines*, Rouen, Lestringa, 1926, pp. 78-79.
- 3) ルーアン市図書館 Bibliothèque Municipale de Rouen 所蔵。説明書は二折判 in-fol で高さ34cm、幅25cm、77葉。水道図の長さはガロール水道図3.40m、カルヴィル水道図8.50m、ヨンヴィル水道図4.70m。都市景観図は幅1.40m、高さ0.65m。主要部分の207図がインターネット上に公開されている。以下、本論内のインターネット

- 情報は、2014年1月12日時点で確認したものである。ルーアン市図書館のHPアドレスは、<http://bibliotheque.rouen.fr/repons/portal/portal/>、参照番号等は Référence : BI-051014-0002 (-0404), Fonds : Manuscrits, Cote : Ms g 3-1 fo 01 (-fo 73 v) (説明書); Ms g 3-2 vue 01(-vue 17) (ガロール図); Ms g 3-3 vue 01 (-vue 46) (カルヴィル図); Ms g 3-4 vue 01 (-vue 19) (ヨンヴィル図); Ms g 3-4 vue av.vo (et vue v vo) (ヨンヴィル図裏); Ms g 3-5 vue 01 (et vue 01 (détail)) (都市景観図); Ms g 3-6 vue 01(-vue 04) (箱)。そのほか、ほぼ原寸大の複製が出版されている。Le livre des Fontaines de la ville de Rouen, par Jacques Le Lieur, l'édition réalisé à partir du manuscrit original, Rouen, Editions point de vues, Imprimerie l'ropa, 2005。これは説明書と3枚の水道図および都市景観図で5巻とし、別冊の解説を加えて函装したものである。この解説者の一人デルサルによる史料紹介・研究に Lucien-René DELSALLE, Jacques Le Lieur et Le Livre des Fontaines, "Connaître Rouen IV", Rouen, Lecerf, 1977, 32 p.; idem, Les Fontaines de Rouen du XVIe au XVIIIe siècle, "Connaître Rouen IV", Rouen, Imprimerie Lecerf, 1994, 35p.; idem, "Jacques Le Lieur, auteur et commanditaire du Livre des Fontaines", in: Bulletin des Amis des monuments rouennais, oct. 2001 - sept. 2002, pp. 37-56; idem, Rouen à la Renaissance sur les pas de Jacques Le Lieur, Rouen, Librairie L'Armitière, 2007がある。また都市景観図は19世紀にグワッシュ(水彩)による修復を経ており、その修復にも携わったジョリモン(1787-1854), Notice historique sur la vie et les œuvres de Jacques Le Lieur, poète normand du XVIe siècle, 1847, Nabu Public Domain Reprintsがある。
- 4) この水道図は(都市景観図もまた) P. D. A. Harvey, *The History of Topographical Maps. Symbols, Pictures and Surveys*, London, Thames and Hudson, 1980, p. 48による「[絵地図 picture maps]の定義、すなわち「記号図 symbol maps」と対比して、縮尺の正確さが重要でなく、記号ではない三次元的な絵画表現を含み、それでいて架空の視点から描かれたもの、に、まさに当てはまる。
  - 5) DELSALLE, *Rouen à la Renaissance*, p. 16。なお『泉の書』複製版の解説によれば縮尺は1トワーズを1.949mとして431分の1。バルデ Jean-Pierre BARDET, *Rouen aux XVIIe et XVIIIe siècles. Les mutations d'un espace social*, Paris, SEDES, 1983, 2 vols., tome 1, p. 118によればヨンヴィル水道は約2.3km、カルヴィル水道は4km超という。
  - 6) David BUISSERET (ed.), *Envisioning the City. Six Studies in Urban Cartography*, Chicago, University of Chicago Press, 1998; Michel WOLFE, "Urban Design Traditions and Innovations in France, 1200-1600", in: *Histoire & mesure XXIV - 1*, 2009, pp. 109-156; 横手義洋「都市を描く イタリア都市図に見る空間の変遷」、高橋慎一朗ほか編『中世の都市 ― 史料の魅力、日本とヨーロッパ』東京大学出版会、2009年、39 - 68頁; Sandrine LAVAUD et Burghart SCHMIDT (textes réunis par), *Représenter la ville (Moyen Age-XXIe siècle)*, Ausonius Editions/Diffusion De Bocard, 2012; Peter JOHANEK, "Bild und Wahrnehmung der Stadt. Annäherungen an ein Forschungsproblem", in: idem (hg.), *Bild und Wahrnehmung der Stadt*, Wien Köln Weimar, Böhlau, 2012, s. 1-23.
  - 7) 拙著『十六世紀ルーアンにおける祝祭と治安行政』、論創社、2011年。
  - 8) JOLIMONT, *Notice historique sur la vie et les œuvres de Jacques Le Lieur*, pp. 3-8; *Heures manuscrites de Jacques Le Lieur reproduction en phototypie accompagnée d'un notice* par Emile PICOT, (Société des bibliophiles normands), Rouen, Imprimerie Léon Gy, 1913。ル・リュールの家系や彼の生涯の著作全般などについては後者のピコによる序文(xci p.)が詳しい。それでも大司教ジョルジュ・ダンボワーズとの間に特記すべき交流はなかったようだ。
  - 9) *Comptes rendus des échevins de Rouen avec des documents relatifs à leur élection (1409-1701), extraits des registres des délibérations de la ville et publiés pour la première fois* par J. FELIX, Rouen, A. Lestringant, 1890, 2 vols. なおル・リュールは1532年に再任された際、就任宣誓に異議を唱えて高等法院でバイイおよび都市参事会と争い、敗訴した。セーヌ・マリタイム県文書の高等法院判決集 AD5M 1B423, 16 juillet 1532; ルーアン市文書の都市参事会議事録 ACR A13, fo 182 vo-183 vo, 16 juillet 1532.
  - 10) ル・リュールが製作させた手稿のパリノ詩集 *Recueil de poésies palinodiques, exécuté pour Jacques le Lieur, échevin de Rouen et prince du Puy de l'Immaculée Conception* が、ルーアン市図書館によってインターネット上に公開されている。Référence : BI-081010-0003 (-0247), Fonds : Manuscrits, Cote : Ms Y 226 a p. 001 (-p. 148)。またピコにより以下が出版された。PICOT, *Heures manuscrites de Jacques Le Lieur (op. cit.)*; *La Passion de N. S. Jesus-Christ par Jacques Le Lieur, Reproduction phototypique d'un manuscrit du Musée Condé, Précédée d'une Notice* Par Emile PICOT, (Société des bibliophiles normands), Rouen, Imprimerie Albert Lainé, 1915.
  - 11) パリノ文芸祭については Denis HUE, *La poésie palinodique à Rouen (1486-1550)*, Paris, Honoré Champion, 2002。なお Alain R. GIRARD, "Les incunables rouennais: imprimerie et culture au XVIe siècle", in: *Revue française d'histoire du livre*, nouvelle série No 53, 1986, pp. 463-525によれば、ルーアンでの活版印刷は1480年代に始まったと見られる。にもかかわらず HUE, *La poésie palinodique*, pp. 442-444によれば、1520年代から40年代まで、パリノ参加者の中では商人で船主のアンゴ Ango が出版を後押ししたとは言え、パリノ関連の出版物は数点に過ぎなかった。
  - 12) *Le livre des Fontaines*, fo 6 ro-vo。当時の西暦年表記は復活祭から年が改まる旧暦表記 vieux style (v.s.) であり、本論では必要に応じて1月1日から年が改まる新暦表記 nouveau style (n.s.) と併記する。なお、この記述からガロール水道は人が立ち入れるような地下トンネルであることがわかる。ヨンヴィル水道は都市城壁外では *Le livre des fontaines*, fo 61 voによると「外側が石で内側が土器の管 en cahotz de pierre où les potz de terre sont enclos et enfermez」という。BARDET, *Rouen aux XVIIe et XVIIIe siècles*, tome 1, p. 118によると、カルヴィル水道の大きさも高さ2m、幅1m。ルーアンでは16世紀のこの当時すでに開発されていた水道によって、近世を通じて水を確保していた。
  - 13) *Le livre des Fontaines*, fo 61 vo-62 ro.
  - 14) *Le livre des Fontaines*, fo 61 ro, "lequel tuyau ma este permis fe par tolerance et permission seulleme't en contemplacion des vaccacions et dilligences et travaux que moy dict Le Lie[ur] ay soutenus et portez en ayant la principale charge soubz mess'rs les aultres conseil's de lad ville de faire venir lad' fontaine prendre garde sus les ourriez qui ont besongne aud' cours ..." とあるので、ル・リュールは相当な出費の見返りに自邸までの導水管 tuyau を得たと見られる。デルサルはル・リュールが1519年から翌年にかけて個人的な攻撃を受けたことについて、この水道設置または金銭負担の多寡が原因ではないかと推測している。DELSALLE, *Rouen à la Renaissance*, p. 12.
  - 15) *Le livre des Fontaines*, fo 3 vo, "Donques comme il soit ainsky que leau soit tant vtille et necessaire pour la vye des hommes tous conseillers gouverneurs et officiers ayans charge de lafaire politique se doibuent de tout leur pouoir efforcer et auoir regard a fournir les villes et cytes de affluovices deaus en tant quil est possible et necessaire. En quoy noz antecessours et peres anciens conseillers et gouverneurs de ceste ville de Rouen nont pas estee negligens. La demonstrence y est euident. Premiereme't par le cours de la fontaine du chasteau anciennement nommee Gaalor lequel ce vuide en ceste ville et cyte de Rouen en six ou sept lieux publiques et serd aussy a lusage des tenneurs." なおル・リュールが『泉の書』を手ずから書いた(描いた)とは必ずしも言えないが、彼の責任において書かれた(描かれた)ものとして、本論中では「ル・リュールが書いた」のように述べる。
  - 16) *Le livre des Fontaines*, fo 4 ro-5 ro.
  - 17) 説明書では見出しに額縁をつけているほか、いくつかのページには天地左右に多色の装飾が施してあり、段落ごとの頭文字も装飾されている。追記のための余白ページを残し、24葉ごとに水道図を挿入した構成も、手書き1点物ならではのと言える。
  - 18) ガロール水道がフィリップ・オーギュスト城砦の地下を通るため、デルサルはこの水道の建設年代を城砦の建設以前と推定している。DELSALLE, *Les fontaines de Rouen*, p. 4。城砦の建設が始まったのは1204年から1207年。Michel MOLLAT (dir.), *Histoire de Rouen, Toulouse*, Privat, pp. 76-77。またこの水道の本流はルーアンの古い壕の跡にそって南下するが、その壕の廃止が認められたのは1224年。DELSALLE, *Les fontaines de Rouen*, p. 8;
  - 19) *Le livre des Fontaines*, fo 10 ro.
  - 20) *Le livre des Fontaines*, fo 30 vo.
  - 21) *Le livre des Fontaines*, fo 58 ro-vo.
  - 22) *Le livre des Fontaines*, fo 59 ro-vo.
  - 23) *Le livre des Fontaines*, fo 60 vo-61 ro.
  - 24) *Le livre des Fontaines*, fo 11 ro, "Coll'on faicte de lad l're par moy Jacques Le Lieur not'e et secret'e du Roy sur ung fort ancien registre couuert de parchemin estant en lhostel commun de lad ville le XXme de januiet lan de grace mil cinq cens vingt quatre J

- Le Lieur.” 説明書のなかでのこれらの照合の日付は、新暦で 1525 年のこの日 1 月 20 日から 7 月 11 日までにはわたる。
- 25) *Le livre des Fontaines*, fo 11 vo-15 vo. これによって屠殺広場に水汲み場が設置されたが、旧市場広場の水供給問題がヨンヴィル水道開通まで解決しなかったところを見ると、旧市場広場には設置されなかったのか。
- 26) *Le livre des Fontaines*, fo 18 vo-19 ro.
- 27) *Le livre des Fontaines*, fo 31 ro-vo, “Soit note que en lan mil cinq cens et saise Robert Deschemps noble hom'e Guill'e Auber seigne' de la Haye Robert Cordier Jaques Guarin Jehan Le Gras et Nicollas Delachaisnaye pour lors conseil'rs de lad ville par meure deliberacion ordonnere't que led cours de lad ville seroit continue et conduit jusques au carfoult de leg'l'e Saint Maclou pour le b'n de la choze publiq' et que la cont' lad egl'e de St Maclou y auroit ung cours de fontaine a deux tuyaulx courans en rue la quelle choze fut contredicte par les paroissiens de la parroisse de Sainte Croix et apres plus's et longues procedures fut dict et declare par mons'r le baylly de Rouen ou son lieu't'n que, nonobstant l'empeschement mys par lesd paroissiens de Sainte Croix lesd conseil'rs seroient permys et auctorises a conduire led cours ainsy quilz verroient bon estre affaire ce q'lz firent joux' la senceuse Donc la tene' ensuit’.
- 28) *Le livre des Fontaines*, fo 8 vo, “Soit note que eud cours dedens les terres y a enuiron de vingt a trente toises de pays qui nest point machonne en fons a raison de quoy y a grosse perte deaue et sy led cours estoit machonne eud endroit com'e le reste et paue en fons il vendroit beaucoup plus deaue a la ville qui ne fait. Soit note q'l y a depuis lad premiere source jusques a l'entree du fosse du chasteau sept vingtz quat' t' de long ou enuiron tout voute dedens les terres ou lon peult cheminer aisement pour visiter lad fontaine et le cours dicelle lequel cours se deueroit visiter ch'un an ou de deux ans en deux ans et est led cours b'n a garder pour lhutillite de la ville car, sy jl auenoit q'lque inconuenient a la voute il seroit de grosse despence a reparer.”
- 29) *Le livre des Fontaines*, fo 10 ro, “Soit note que dud cours jl est tres facile faire venir vne fontaine au milieu de la court de la maison commune de lad ville qui seroit vne choze fort honneste et utile et sans grand despence”.
- 30) *Le livre des Fontaines*, fo 26 vo-27 ro.
- 31) *Le livre des Fontaines*, fo 29 vo-30 ro. 大司教ジョルジュ・ダンボワーズ 1 世は教皇特使 leguat でもあった。水道が壕を通る部分について使われている語は *bastardeau* で、防水堰または涵洞を意味するが、暫定的に「導水管」と訳した。
- 32) *Le livre des Fontaines*, fo 33 vo-34 ro.
- 33) *Le livre des Fontaines*, fo 23 vo.
- 34) *Le livre des Fontaines*, fo 52 vo.
- 35) *Le livre des Fontaines*, fo 67 ro. および、ここでの「改修後の図を元の図の裏面に示す」との記述の通り、改修後の水道の長さや屈曲がヨンヴィル図の裏に描かれている。
- 36) *Le livre des Fontaines*, fo 18 ro-vo, “Item, depuis lad premi' cuue estant dedens la ville assise au bout de la rue aux Chevaux deuant lad maison de Fescamp led cours va deuant leg'l'e de Mons'r Saint Salue' au lieu nom'e le Viel marché, ou jl y a vne fontaine assise joux' et sus les muretz du cimeti'e de lad egl'e de Saint Salueur et a lad fontaine cours a troys tuyaulx sortissans par la geulle de troys beufz au dessus de vngne grand cuue a receuillir les eaues p'dues po' les faire courir sus le paue tant du coste de la poissonnerie que du coste de deuers le Palais par deuant la maison de la maison Desneual pour nectoyer et aualler les ymondisses estans ausd lieux.” 図では旧市場広場・魚市場のほかに肉市場 les halles de la boucherie が示されているが、宮殿とエヌヴァル邸は示されていない。旧市場広場への水供給の問題は 1505 年と 1511 年にも都市参事会で話題になっていた。ACR A10, fo 3 ro, 1er avril 1505; ACR A10, fo 200 ro, 24 janvier 1510 (v.s.).
- 37) *Le livre des Fontaines*, fo 8 ro, “Item, depuis lad troiziesme jusques a l'entree du fosse deuant la grosse tour du chasteau y a vinte quatre toises. Soit note que enuiron huit toyses dedens led cours Du temps du siege mys deuant lad ville y eust vne forte muraille faicte pour estouper led cours pour euitier a linconuenient qui eust peu aduenir que les ennemis ayans congnoissance dud cours eussent peu entrer par led cours eud fosse du chasteau et ce est a noter pour vne aultre foys ou tel cas escherroit.”
- 38) *Le livre des Fontaines*, fo 64 vo-65 ro, “Soit note que par led cours de lad fontaine qui est tout voute en temps de hostillite ou aultreme't lon pourroit entrer et hissir de la ville qui est fort a noter po' ce qui se en pourroit en finir des inconueniens merueilleuseme't domnagables et jrreparables pour la ville et pour la chose publique.”
- 39) *Le livre des Fontaines*, fo 65 ro-66 ro, “En Lan de la Redemption humaine mil cinq cens vingt cinq Le XXXe jour de janvier Que moy Jacques Le Lieur, not'e et secret'e du Roy s'r de Bresmetot et nagueres conseiller de lad ville Donnay ce p'nt liure a la co'munaulte de lad ville et le p'ntay à nobles hommes Jehan Le Roux sr de l'Espreuier Guillaume Auber sr de la Haye Jehan Duhamel sr du Busc Jehan de Hautot garde des seaux de la Vico'te de Rouen Michel de Batencourt et maist' Nicolle Osmont conseillers dicelle maistre Pierre Le Goppil sr du Parquet procureur de lad communaulte en la p'nce de Jehan Papillon clerck et greffier d'icelle communaulte pour estre et demourer a tousiours en la maison co'mune dicelle ville tel que dessus est escript estoit lestat et ordre cours et source des fontaines de ceste ville de Rouen. Lequel auoit este charche veu teze pourtraict et redige par escript en ce p'nt liure de la main de moy dict Le Lieur en ayant plus esgard de fideleme't escripre la verite en langue familiere q' curieuseme't obseruer grande et profonde eleguance en ma descrip'on. Et pour ce que legreme't tout ho'me peult errer et principalement es chozes de grand antiquite ou pou ou riens escriptes ou de quoy la prolixite du temps qui tout extermine et reiecte arriere ou anientit la congnoissance du vray en tenebres et obscurite, Je pry'e à toux les bons p'sonnages qui ont a succeder en ceste maison de police que leur plaisir soit supporter les erreurs sy aucunes en y a et les emender fraternellement. Et sy lescript et les cours ne sont mys et drechez en tel ordre que l'affaire le requeroit bien ce neanmoins ce pourra prouffiter a la pollice. De auoir mys en aucune lumiere et congnoissance ce qui estoit en tenebres et presque totalement jgnore mesmes aussy ce qui a este faict de mon temps redige en quelque ordre po' estre perpetuel. En stimulant et jncitant toux bons zelateurs du bien publique de jmpartir par emulacion louable leur entendeme't paine et labeur a augme'ter ou reformer les chozes de bien en mieux ou pour le moins continuer et adiouter en ceste p'nthe histore ch'un en son temps ce quil suruiendra et sera augmente ou innove au faict desd fontaines. Et pour ce f'e le' ay delaisse par mon testament la plume et parchemin prepare en la fin de la description de ch'une fontaine p'ticuliereme't mesmes a la fin de ce liure les exortant y exercer et employer leurs espritz a lhonne' de celuy Seigne'r qui tout peult et duquel lesprit tres sacré estoit en la prime creacion du monde deporté sus les eaues.”
- 40) *Le livre des Fontaines*, fo 73 ro-vo.
- 41) DELSALLE, “Jacques Le Lieur, auteur et commanditaire”, pp. 41-45; idem, *Rouen à la Renaissance*, pp. 61 et 441.
- 42) DELSALLE, *Jacques Le Lieur et Le Livre des Fontaines*, pp. 23-25.
- 43) DELSALLE, *Jacques Le Lieur et Le Livre des Fontaines*, p. 27.
- 44) 16 ~ 17 世紀に作成された都市図は必ずしも街路や広場を強調した平面図ないし鳥瞰図ではなかった。WOLFE, “Urban Design Traditions and Innovations”, p. 127 では、真横からの側面図 profile と真上からの平面図 ichnographic の間に、「斜め 45 度からの鳥瞰図 bird's eye view」を含む 4 段階の角度の斜め投影図を分類している。ブラウンらによる都市図集 Georg Braun & Franz Hogenberg, *Civitates orbis terrarum* (1572-1617) には、この分類に厳密に当てはまらないまでも、さまざまな角度から描かれた都市図が混在しており、この中のルーアン図も東の郊外区にある聖カトリヌ丘から見下ろしたような角度で、道路網が不明確な建物群として描かれている。
- 45) DELSALLE, *Jacques Le Lieur et Le Livre des Fontaines*, p. 21.
- 46) DELSALLE, *Jacques Le Lieur et Le Livre des Fontaines*, p. 16; BARDET, *Rouen aux XVIIe et XVIIIe siècles*, tome 2, p. 78.
- 47) DELSALLE, *Rouen à la Renaissance*, p. 16.
- 48) JOHANEK, “Bild und Wahrnehmung der Stadt”, S. 14-16; WOLFE, “Urban Design Traditions and Innovations”, pp. 124-125.
- 49) この塔は 1514 年に火災に遭い、再建されるのは 1547 年である。GAUTHIEZ, “Les places de Rouen”, p. 155. 火災の記録は ACR A10, fo 349 vo-350 ro, 6 octobre 1514.
- 50) GAUTHIEZ, “Les places de Rouen”, pp. 156-157.
- 51) *Le livre des Fontaines*, fo 4 ro, “Et depuis feu tres bonne memore le reure' d'issime monsr Georges de Amboise Cardinal et Leguat en France Archeuesque de Rouen Emulate' des vertus Romaines Vray zelateur et amate' de lhonneur bien et augmentation de la choze publique et sur tout de ceste ville de Rouen”
- 52) *Le livre des Fontaines*, fo 62 vo, “Noble homme maist' Guill'e Le



Roux seigne' du Bourgtheroulde et conseil'r du Roy en sa court de Parleme't a Rouen comme vray et bon zelate' du bien publique paya par ch'une sepm' de ses deniers propres toux les ouvriez besongna's eud cours et presta a lad ville en la maniere que dessus jusques a la so'me de douze a quinze cens liures tourn' lesquelz luy furent rendus et remboursez".

- 53) 例えば 1519年にルーアンの高等法院が出した治安令は、「公共の事柄の利益と有用性のために、そして市内と郊外区で日夜生じている殺人・喧嘩・盗みを止めるために」武器携行、浮浪者、居酒屋、賭博、娼婦などを取り締まりの対象として挙げる。*Ordonnances de 1519 sur le fait e la chose publique à Rouen publiées avec introduction par le Dr. G. PANEL (Société rouennaise de bibliophiles), Rouen, Imprimerie Albert Lainé, 1925, p. 2,* "pour le bien prouffit & vtilite de la chose publique & affin de faire cesser plusieurs meurtres debatz excez pilliers & larcins que se commettent tant de iour que de nuyt en cette ville de Rouen & es faulxbours dicelle".
- 54) 拙著で、入市式などの参加者が都市の構成員の確認となっている点を指摘した。なお『泉の書』作成当時の国王であるフランソワ1世の入市式の記録として *L'Entrée de François 1er roi de France dans la ville de Rouen, au mois d'Août 1517, réimprimé d'après deux opuscules rarissimes de l'époque et précédée d'une introduction par Charles de Robillard de BEAUREPAIRE, Rouen, Imprimerie de Henry Boissel, 1867* がある。そのなかでルーアンの人々は国王の行幸を「たいへん喜ばしく、奉仕と尊敬の念をもって迎える」として "Les citoyens dicelle ville de roue[n] tresioyeux de la venue de leur souuerain seigneur et desirans trasaffectedusem[en]t et de tout leur cueur faire service a luy aggreable ense'ble selo' leur povoir luy rendre lhonneur reverence et obeissance deubz a sa maieste Royale yffire't allere't hors lad' ville en tel ordre q'ensuit audeua't dud' seign'r" (p. 2)、具体的には国王を出迎えるパレードの参加者の序列と人数、衣装についての詳細な叙述がなされる。それと対比して見るとルーアンのブルジョワを代表してバイイが国王に述べた歓迎の辞についても、租税法院と高等法院の院長が述べた歓迎の辞についても、「短く優雅で国王に良しとされた」という以上の記述がなく、彼らが国王にルーアンをどのような言葉で紹介したかは窺えない "Toutes icelles co'pagnies se prese'terent par ordre deua't le roy en la prarie dudit lieu de gra'tmont. Et fure't deuant luy faitz iij. propos pri'cipallem'e't lung par mo'seign'r le bailly de Roue' pour les bourgoys et co'mmunite dicelle ville. Le second par monseign'r le preside't de lad' court des generaulx. Et le tiers par mo'seign'r le premier preside't de lad' court de parleme't. Et le tout en si bo'ne et briefue elega'ce q' lesdis proposa's et leurs co'pagnies fure't au roy tresagreables. Et les receut treshumainem'e't et honorablem'e't Jcelles choses acco'plies se retirere't en ladicte ville toutes les compaignies et be'des en tel ordre quilz ent estoie't yssus". (p. 6)